

今年の教区の目標

神に希望の錨をおろすなら
すべては祝される

〒902-0067 那霸市安里3-7-2

カトリック那霸教区本部

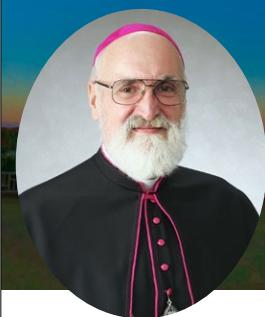
TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474

発行人 W.F.バート司教 1部40円

<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2025年1月1日(毎月1日発行) カトリック那霸教区報 MINAMI NO KŌMYŌ

第794号(1月号)



新年司教メッセージ

『希望の巡礼者』として漕ぎ出そう!



ウェイン・F・バート司教

あけましておめでとうございます。
新たな年を迎える心あらたまるこの時、新たな歩みをはじめるにあたつて、今年の教区目標とともに特別な祝福を送ります。

**神に希望の錨をおろすなら
すべては祝される**

吹き荒れる嵐の中でも、荒れ狂う波に翻弄されても『希望の巡礼者』として神の祝福のうちに主によつて、主と共に、主の道をまた新たに歩み始めましょう!

人生は時の旅路、私たちは時の旅人です。この世に生を受けたその瞬間から、すべての人は時を経てゆく旅人として存在します。誰一人時の流れの外にいる人はなく、どんな人も生きている限り刻々と流れ去る時間の中で、外的にも内的にも常に変化してゆく状況に置かれているのです。そのような人間存在のあり方を人はよく船旅にたとえてきました。

順風の時、逆風の時、荒れ狂う高波の時、穏やかな風の時。どの人生にも良いと思える時もあれば、最悪を感じる時もあるのです。目前の状況に一喜一憂し、目的を見失い右往左往する時もあれば、しっかりと目標を見据えて前進する時もあるでしょう。また、人生の海原の広大さ

と自由さに気付くと、逆に何を頼りにどこに向かえばよいのかに戸惑い、孤独を感じることさえあります。

翼を張って上る。走つても弱ることなく、歩いても疲れない」(イザヤ四十・29~31)

兄弟姉妹の皆さん、人生の荒波は誰もが経験します。旅路に困難は付きものです。どんなに苦難の時が訪れます。ようとも嵐は必ず過ぎ去りますが、この嵐に堪え、この苦難を乗り越えるためには希望という錨が必要です。神へのあこがれ、神への希望はどんなに荒れ果てた時空の中でも私たちを神ご自身につなぎとめ、人生の大平原を漂流することなく、豊かな旅路としてくれます。

「わたしたちが持つているこの希望(神の約束)は、魂にとつて頼りになる、安定した錨のようなものであり、また、至聖所の垂れ幕の内側に入つてゆくものなのです。」(ヘブライ六・19)

でも、希望があれば旅立てます。先行する神の愛に希望を見出だし、その後押しを受けて漕ぎ出すなら、喜びと幸せに満ちた旅路を進むことができます。イザヤは預言します。

神は、「疲れたものに力を与え勢いを失っている者に大きな力を与えられる。若者も倦み、疲れ、勇士もつまずき倒れようが、主に望みを

おくる人は新たな力を得鸞のように



2025 New Year's Message

“If we Anchor our Hope in God, everything will be a Blessing”

Dear Brothers and Sisters of Naha Diocese,

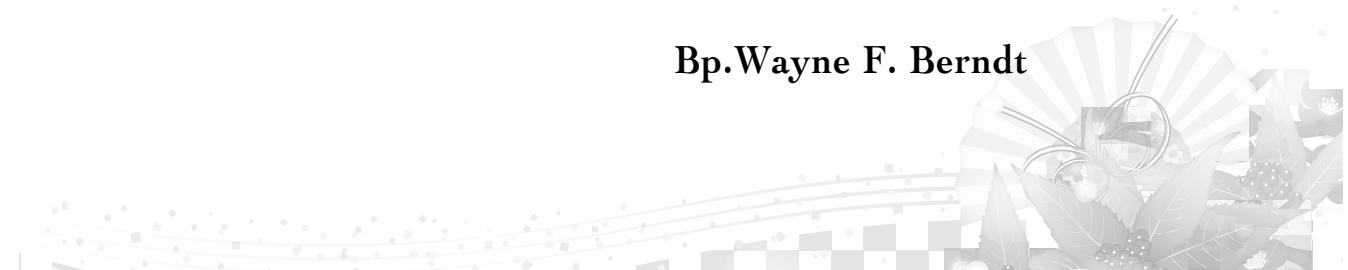
Happy New Year! As we start the year 2025, I want to wish you and your family a very prosperous new year. Every 25 years the Catholic church celebrates a Jubilee Year, which we call a Holy Year. During the Holy Year 2025 there will be events in Japan to deepen our faith and strengthen our bonds with the Lord. Your pastor will explain to you how the Jubilee Year will be celebrated in our diocese. The theme of the Holy Year is: “Pilgrims of Hope!” Pope Francis feels strongly that the world is very much in need of hope. In the Bible, 1 Corinthians 13:13, it states that there are three things that will last forever: faith, hope, and love. While we learn about faith and love, we may not know much about the virtue of hope. To have a better understanding of the virtue of hope, and in line with the theme of the Holy Year, I have chosen the words, “If we Anchor our Hope in God, everything will be a Blessing” as the aim for Naha Diocese this year.

There are two scriptural texts that are very helpful to understand the virtue of hope. The first is Hebrews 6:18-19. “We who have found safety with him are greatly encouraged to hold firmly to the hope placed before us. We have this hope as an anchor for our lives. It is safe and sure, and goes through the curtain of the heavenly temple into the inner sanctuary”. Based on this scriptural text the symbol of hope in the church has always been the anchor. A boat tossed on the sea is a symbol of the pilgrim church. It may also be interpreted as a symbol of our individual journeys. Anchoring our life in God is the only sure way to be able to survive any storms or disasters that we may encounter.

The second text is Isaiah 40:31: “Those who hope in the Lord will renew their strength. They will soar on wings like eagles; they will run and not grow weary; they will walk and not be faint.” In other words, those who hope in the Lord will be blessed in every way during their lifetimes. It does not mean that we will not have problems. But even when we have problems, God will be at our side to help us. For example, many people during the height of the Covid pandemic lost hope that things would return to normal again. But others who trusted and placed their hopes in God, knew that He would never abandon us. Anchoring our hopes in God allows us to see things and events with a different perspective. This leads us along a path of trust in God where everything becomes a blessing.

Have a wonderful New Year. May it be filled with God’s love and his peace. As Pilgrims of Hope let us anchor ourselves in God and let the New Year be filled with every blessing.

Bp.Wayne F. Berndt



2024年12月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時: 2024年12月3日(火) 10:00~12:00 於・安里教区センター

1. 報告及び連絡事項: 司会はロドニー神父が担当。ウェイン司教が初めの祈りを唱えて開式した。

- 前回(11月会議)の報告を新田が行い、承認された。
- 出張、休暇、研修等の不在予定の報告が行われた。
 - ピーター・チエ神父、11/29~12/19、休暇。
 - ウェイン司教、12/11、東京、フランシスコ教皇来日5周年記念ミサ、四ツ谷。
 - 12/12、第二回臨時司教総会、潮見。
 - 12/20~21、菊池功権機卿親任祝賀ミサ、東京。
- 教皇フランシスコの要請を受けて、日本司教団が定めた「性虐待被害者のための祈りと償いの日」は、毎年四旬節・第2金曜日とされている。今年もポスターを注文するので、確実に周知し、教区のハラスマント対策宣言文も一緒に掲示し、教会全体の意識を高めるよう要請された。これに付随して、以下の注意が促された。最近様々なハラスマントに関する声が聞かれる。これに関しては、一方的な主張に基づく予断は許されないが、何らかの事実に由来することが多い。そのつもりは無くても、指導的な立場にある聖職者には厳しい目が向けられやすい。加えて言葉づかい、文化、慣習などを充分体得できていないハンディもある。これを自覚して、謙虚な心で司牧に当たるべきである。常に相手の立場に立って、相手をおもんぱかって接し、安易なスキップや特定の個人との関わりは厳に慎むこと。また、携帯メールのやり取りも誤解を生じやすいので、司祭たちには十分気を付けて欲しいとの注意が、ウェイン司教から行われた。
- マーシーさんからカリタス沖縄の活動について報告がなされた。11月16日に行ったビーチクリーンの清掃作業には、メンバーの15人が参加して他の市民団体との協働で、1時間程度作業したことが報告された。また、12月には子ども支援をしている市民団体と共に子どものクリスマスプレゼントを準備して配る予定であることが報告された。
- ウェイン司教から、2月11日の「教区の日」に向けて、来月の司祭会議(1/7)までに、お祝いの対象者の報告が確実になされるよう要請があった。司祭、修道者は25年と50年、信徒は夫婦とも健在で金婚の年を迎える方々が対象となる。

2. 審議事項

- 各教会の主日とクリスマス、新年のミサ時間の報告が行われた。
- 2025聖年の開幕式とミサの典礼についてボスコ神父から報告が行われた。12月29日聖家族の主日の午後2時から開南教会において、ウェイン司教主式のもとで執り行われる。
- ヨアキム神父から聖年の取組について報告が行われた。ポスターを作成してあるので、各小教区に掲示されるよう依頼がなされた。また「聖年の祈り」のカードを配布するのですべての信者に行き渡るように配り活用するよう要請があった。月別の小教区当番表を作成し、各小教区の持ち回りで祈りの当番を担当する。また、教区内の開南教会、名護教会、宮古島平良教会と石垣教会を巡礼指定教会とし、指定教会への巡礼や他教区への巡礼も計画したい旨提案が行われた。
- ウェイン司教から教区目標案が提示され、協議の上了承された。2025年教区目標は、「神に希望の錨をおろすならすべては祝される」に決定した。『南の光明』新年号の年頭挨拶でこの目標について説明言及する。
- 12月28日(土)に青少年のためのクリスマス会を行うことが、担当のブイ神父から報告された。安里教会を会場に、午後1時半に集合して歌の練習や準備、2時半からミサを行って、終了後にBBQやbingoゲームを行う予定であることが報告され、ポスターの掲示や当日の参加が司祭たちへ要請された。
- 津波古事務局長から、延期された教会会計研修会について、年明け1月13日(月)に安里教区センターにて、午後1時から3時の日程で開催するので、各小教区から司祭、信徒会長、会計の少なくとも3人が参加するよう、強く要請された。
- 司教予定が報告された。
 - 12/5、愛樂園教会の公式訪問。
 - 12/8、県民クリスマスの集い、胡屋バプテスト教会。
 - 12/15、コザ教会ミサ司式。
 - 12/24、開南教会、午後7時、ミサ主式。
 - 12/25、安里教会、午前9時、ミサ主式。
 - 12/28、安里教会、午後2時半、子どものクリスマス・ミサを主式。
 - 12/29、開南教会、午後2時、聖年開幕ミサを主式。
- 1/5、コザ教会公式訪問。
- 1/26、具志川教会からサントニーニョのお祝いを予定しているので、司教の参加が要請された。
- ウェイン司教から、ゆるしの秘跡について、信徒から要望が多く寄せられているので、司祭たちは時間を決めるなどして、信徒たちが秘跡を受けやすい環境に配慮するよう要請があった。
- 11月に宮古島平良教会で行われた司祭会議について、司祭たちへ感想が求められ、様々な提案や意見が述べられた。訪問できなかった南静園教会について、教会堂としての活用が今後も見込まれないため、園に建物を寄贈する方向で話が進められていることが報告された。また、愛樂園についても将来的な話を進めていく必要があることも報告された。
- リカルド神父から、叙階25年を記念して出身のダバオで、4月30日に記念ミサと祝賀会を予定しているので、参加の呼びかけが行われた。
- 安里修道院から専門学校に通っているシスター・アイビーのご尊父が帰天され、急ぎ帰国されたので、お祈りをお願いする旨、ウェイン司教から要請があった。

※次回司祭助祭拡大会議は1月7日(火)午前10時から、安里教区センターで開催される。



「希望」は欺かない！

ヨセフ・ブイ神父

泡瀬教会 主任司祭



二〇二五年は通常聖年として、特別に神さまの恵みに与る年となりました。教皇フランシスコは「希望は欺かない」というメッセージを全世界に送りました。

「希望」は聖年のキーワードです。ご存知のように、『カトリック教会のカテキズム』では、希望は対神徳の一つであり、キリストが私たちにしてくださった、「天の国」と「永遠のいのち」に生きるという約束に信頼し、聖霊の恵みの助けに寄り頼みながら、天の国と永遠のいのちを待ち望む徳です(1.1817)。

神様は、人間を創造されたとき、ご自分が味わつておられる

幸せを、人間にも分かち合いたいと思われ、その心を人間に与えになりましたが、このように、すべての人に心に神がともしてくださいました。幸福へのあこがれに応えるものが、希望の徳です。だから、キリスト教的希望は、私たちの人生を喜びで満たす神の賜物です。

信仰生活を送るうえで、わたしたちは神の恵みによつて生きていることをまず思い起こさなければなり

ます。希望を奪られた受刑者や死刑囚。あるいは病気や障害を持つ人。高齢者。多くの若者も希望を奪われている。孤独を感じたり、見捨てられたと感じて希望を失つたりする人がいる。そして世界の中に数限りなく存在している貧しい人々の現実。

このような、希望を失いそうになる現実がたくさんあるこの時代だからこそ、希望を掲げて歩む巡礼者になろう。教皇はそう呼びかけるのです。また、今年の那覇教区の目標を、ウェイ

ン司教様は「神に希望の錨をおろすなら、全ては祝される」となさいました。司教様の説明から、この希望とは錨(いかり)です。

一般に希望とは、何か素晴らしい物事を願うことですが、実現するかどうかは定かではない。

この場合の「希望」は「それが実現するといい」という一つの「願い」に過ぎません」と教皇様は指摘します。「たとえば、『明日は晴れるといい』と願つていて

この聖年が私たちの信仰を強め、復活のキリストを生活のただ中で見出す助けとなり、私たち

ません。主イエス・キリストこそ恵みです。すべての恵みは、主イエス・キリストを通してわたしたちにもたらされたのです。そして、わたしたちは神の恵みによって与えられた信仰、希望、愛のうちに、神とのさらなる交わりと一致を生きるように招かれています。信仰、希望、愛は神の恵みによつてわたしたちのうちに育まれる徳で、対神徳と言っています。しかし、その神に私たちの望みと信頼を置くことが、何か新しいことを

始め、それを成し遂げようとする際にも大切です。希望は、信仰者の生き方の方向と目的を示す、いわば指南役です。聖年の状況の中で、平和への希望を持てるか？あるいは多くの国で見られる出生率の低下。そこには経済的な理由もありますが、物質主義や価値観の問題もある、まさに希望の問題だと教皇は言います。

希望を奪われた受刑者や死刑囚。あるいは病気や障害を持つ人。高齢者。多くの若者も希望を失つたりする人がいる。そして世界の中に数限りなく存在している貧しい人々の現実。

それは永遠のいのち、イエス・キリストと一つになることです。

この聖年が私たちの信仰を強め、復活のキリストを生活のただ中で見出す助けとなり、私たち

てみましょう。世界はそれを強く必要としているのです。希望は、今は非常に危うい状態にあることでも意識されています。戦争の状況の中で、平和への希望を持てるか？あるいは多くの国で見られる出生率の低下。そこには経済的な理由もありますが、物質主義や価値観の問題もある、まさに希望の問題だと教皇は言います。

希望とは、すでに完成した出来事で、私たち一人ひとりに確かに実現する出来事を待つこと、なのです」とも説かれています。

そして「キリスト教的希望」をもとで生きる大勢の兄弟姉妹にとつての、確かな希望のしるしとなるよう求められます。神の愛が注がれているから、苦難が「希望」に変わる。人間の力では変えられないことが神の愛に

よつて、苦しいことが「希望」に

変えられてくる、あるいは苦しむことを乗り越えていく解決方法とか、乗り越える力とか、そういうことが与えられるということです。

「世の中にあって希望とは、経済的に豊かになる、名声を得る快楽を得ることなどであることが多いです。しかし私たちの希望はそれらにはるかに勝る希望です。

それは永遠のいのち、イエス・キリストと一つになることです。一般的に希望とは、何か素晴らしい物事を願うことですが、実現するかどうかは定かではない。この場合の「希望」は「それが実現するといい」という一つの「願い」に過ぎません」と教皇様は指摘します。「たとえば、『明日は晴れるといい』と願つていて

「そこに扉があり、その扉にたどりつくるを願うこと」と喻えられ、「わたしたちのすべきことは、その扉に向かつて歩くことであり、わたしたちはそこに扉があることを確信している」と話されました。

心に主との出会いへの希望を抱くことで、私たちは、日々の小さな苦労が決して無駄にならないことを知っています。私たちは、「平和と正義と愛を生きる新たな世界」に向かつて、毎日巡礼者として一步を刻んでいきます。「希望の道」の本で枢機卿 Vén.Thuânは「キリスト者は、闇の中の光であり、人生にもは塩であり、望みを失つた人類のただ中での希望であります」と書いています。だから、一人人が洗礼を受けてからの長さに関係なく、互いに希望を持ち、福音的に生き、互いに愛しあう、そういった生活を行ふことを、今年の聖年で頑張りましょう。

親愛なる皆様、あけましておめでとうございます。

繋がっていきます

りが感じられません。安全祈願シールのデザインは、シンプルながらも、力

す。イエス・キリストの名の下に集まる私達が貫くべき柱は「互いに愛し合いなさい」という言仰で、黄こそがる中間

先日、末娘がクララ幼稚園の年長さんとして、聖劇を演じてくれました。聖劇で、天地創造とイエス様の誕生が描

かれますが、太陽、月、星、野の花、動物、水、魚、鳥に至るまで、皆、神様に造られた仲間たちです。神様との約束を破り、エデンの園を追われた人間達に、いつか救いのみ子が送られるという希望で天地創造を終えました。私の娘は、イエス様の誕生で、マリアに嬉しいお知らせを告げる大天使ガブリエルを演じていました。「幸

教会のお正月で印象に残っているのは、いつだつたか忘れていましたが、新年ミサの聖体拝領で、ぶどう酒を飲ませていただいた事です。何やらいつもと違うお正月のセッティングに聖杯が置かれ、ぶどう酒が入っているらしい？「え？ ぶどう酒飲めるの？」本当に？」なんてワクワク、ドキドキしながら並んだ聖体拝領。パンをいただいたあと、聖杯の前に来て「これをわたしの記念として行いなさい」という言葉に、厳密には、ぶどう酒も含まれる

のデザインは、シンプルながらも、カトリックの信仰を表すものとなつておなり、毎年、どんなデザインになるか楽しみにしています。息子と話し合つたところ、「自転車にも欲しい」と言つていたので、神父様、ぜひ、息子の自転車にも祝福を下さいませ。（自転車で新年ミサに来させる様にいたします。）例年、車の安全祈願シールは、一台一台、丁寧に祝福してくださるので、かなりの時間がかかるつていたイメージでした。賛否両論あると思いますが、昨年あ

たて軸よこ軸

クリスマスから聖年へ 神性を体現する年

与那原教会
城間
吉主

「かで神様の子を産むでしよう」といふ台詞をしつかり覚えて、堂々と演じていました。マリアが「私が神様の子を産むのですか?」という問い合わせに対し、「神様にできない事はありません」と返します。「全能の神」という概念は私達、信仰でつながる者がしつかりと覚えておきたい信念です。

また、今年、小学校六年生になる息子は過去の聖劇で博士を演じましたが、一月は「主の公現」として、博士たちがイエス様の馬屋にたどりついた事を祝う期間にもなっています。続いて、「主の洗礼」で、洗礼者ヨハネからイエス・キリストが洗礼を受けたエピソードに

どなんお味なのかしら？ と俗物的な
のから？ などと思ひながら さて
考えがよぎり・・・。一口いただいたぶ
どう酒(御血) の美味しかつたこと。た
ぶん、二度目の初聖体ですね。思い起
こせば、初聖体の子ども達の気持ちが
よくわかる様な気がしました。でもこ
の時の私には、「主の御血をいただく」
という「本筋」はスッカリ抜け落ちてい
たと思います。(反省)。

教会の新年といえば、車の安全祈願
とシール、それに新しい短冊も欠かせ
ません。これがないと新しい年の始ま

決して欺かることはない」という教皇様の聖年の教令からのお言葉になりました。短冊は年間を通して、各家庭のよく見る場所に掲げられるかと思います。その時に、信仰の本質に立ち返ることのできる言葉があるのは、本当に心強いことです。

祝福をこの家に」とあつて、我が家に飾られていました。今年の短冊は「主に希望をおくる者は、昨年の短冊は「神よ慈しみとしきみ

ク教会の私たちの結束がより高まる事を祈りながら、結びといたします。

「決して欺かることはない」という
教皇様の聖年の教令からのお言葉にな

りました。短冊は年間を通して、各家庭のよく見る場所に掲げられるかと思います。その時に、信仰の本質に立ち返ることのできる言葉があるのは、本

この原稿の執筆にあたり、「たて軸・よこ軸」というタイトルの意味を考えました。たぶん、どなたかがちゃんと定義して下さっているとは思うのですが、私なりの考え方で、「たて軸」は信仰、「よこ軸」は被造物、と思つています。





希望は欺かない—2025年の通常聖年公布の大勅書

「希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖靈によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」(口マ書 5:5)

2024年12月24日にバチカンのサンピエトロ大聖堂の聖なる扉が開かれて開幕し、2026年1月6日の主の公現の祭日に同扉が閉じられ閉幕する通常聖年。この聖年を公布する大勅書において教皇フランシスコは、聖年を、神の恵みから希望を受け、神へと向かう歩みを強めていただく機会とともに、困難にある多くの人に希望をもたらす者となるよう招いています。



左のロゴマークは、地球の四方から集まってきた全人類を、四人の図案化された人物によって表現しています。彼らは抱き合っていて、すべての民を結びつける連帯と友愛を示しています。先頭の人物は十字架をつかんでいます。それは、抱いている信仰のしるしであるだけでなく、捨て去ることのない希望のしるしでもあります。なぜなら、希望はいつでも、そして深く困窮しているときにはとくに、求められるものだからです。

人物の下に押し寄せる波は、人生の旅がいつも穏やかな歩みであるとは限らないことを示しています。個人的な出来事や世界に起きていることの多くは、より強く希望を求めるものです。ですから、長く伸びて、錨の形に変わって波に下ろされている、十字架の下部が強調されているのです。ご承知のとおり、錨は希望の比喩としてよく用いられます。事実、船乗りの符牒では、嵐の際に船を安定させるため、緊急発動するボートによって投錨される予備の錨のことを「希望の錨」といいます。

このロゴが表すものとして見逃してはならないのは、巡礼の旅は個人的なものではなく共同体的なもので、よりいっそう十字架へと向かっていくダイナミズムを備えたものだということです。この十字架は、静的ではなく動的なものです。人類を捨て置かず、人類に向かって身を伸ばして、存在の確かさと全き希望とを与えてくださるのです。

ロゴの下部には、2025年の聖年のテーマ「希望の巡礼者」が、緑の文字で鮮やかに記されています。

2025年聖年の間、各教区の司教座聖堂や、教区司教によって指定された教会・聖堂を訪問することで、免償を得ることができます。(免償の解説や、今回の免償に関する教皇書簡は中央協議会ホームページを参照してください)

那覇教区では以下の教会が指定教会となっています。

- ・那覇カテドラル開南教会・名護教会・宮古島平良教会・石垣教会

※巡礼指定教会を訪れて免償を得るために「ゆるしの秘跡」が条件になります。

巡礼のため指定教会を訪れる際は、主任司祭の所在を事前に確認してください。



Book 本の紹介

社会司教委員会は、書籍『すべてのいのちを守る教会をめざして—ハンセン病問題過ちを繰り返さないために』を発行しました。

すべての
いのちを守る
教会を
ハンセン病問題
過ちを
繰り返さないために
めざして

那覇教区子どもと女性の権利を擁護するデスク

相談窓口 ☎ 098-863-2020 (火・水・木 13:00~17:00)

計報

◆愛樂園教会 パウロ 鹿川 幸三 様
2024年12月19日帰天 享年89

オンライン版『教会の祈り』について

2024年11月25日
日本カトリック典礼委員会

従来「教会の祈り」は「聖務日課」とも呼ばれて、聖職者や修道者固有の祈りのように思われてきました。しかし、第二バチカン公會議の典礼刷新によって、キリストを頭とする教会共同体が、祈りを伴つて時間(生活)をささげる奉仕であることが強調され、「時課の典礼」(Liturgia Horarum)と改称されました。

そのため日本教会においては、「時課の典礼」を「教会の祈り」と呼ぶことにして、信徒の皆様にも唱えていただくよう勧めてきました。このオンライン版『教会の祈り』は、日々の生活の中で、キリストとともにささげる奉仕の祈りに、よりいつそう可能な範囲で親しんでいただくための補助的な手段です。

「教会の祈り」を一緒に唱える際、ラテン語規範版「時課の典礼」は4巻本として編集されていますが、日本の教会では、この規範版に従う「教会の祈り」4巻本の出版を目指していく過渡的な段階にあります。このたびのオンライン版の公開は、そのための出版準備となるものです。また、オンライン版『教会の祈り』は、新しい「ミサの式次第」に準拠した式文や聖人名の新

しい表記、随時追加されていく新しい聖人等の結びの祈願などを、書籍版『教会の祈り』に補足する役割を担うものもあります。「教会の祈り」を一緒に唱える際、司牧的配慮やさまざまな理由から、書籍版とオンライン版の併用は避けられないかもしれません。教会共同体でこの伝統的な祈りを唱える典礼祭儀においては、書籍版の使用が望ましいことを、共通理解として大切にしていきたいと思います。

オンラインで公開されるデータは、おもにスマートフォンでの利用を配慮して編集されています。そのため、その他の端末を利用する場合、表示画面がディスプレイにうまく収まらないことがあるかもしれません。ご理解をいただきたいと思います。なお、簡単なオペレーション版『教会の祈り』利用ガイドを準備いたしますので、参考してください。幸いです。このオンライン版『教会の祈り』が、利用者の皆様の「祈りの友」となることを願いつつ。

以下のURLから、無料でアクセスできます。

URL: <https://inoricatholic.jp>



キリスト教一致祈祷週間 2025年1月18日-25日

あなたはこのことを信じますか(ヨハネ11・26参照)
Do you believe this? (John 11:26)

コンスタンチノープル近郊のニケアで最初の公会議が開かれてから1700年目

2025年のキリスト教一致祈祷週間は、2025年1月18日(水)～25日(水)、全世界で行われます。今回のテーマは、「あなたはこのことを信じますか」(ヨハネ 11・26)です。2025年は、コンスタンチノープル近郊のニケアで最初の公会議が開かれてから1700年目にあたります。これを記念することは、キリスト者の共通の信仰を振り返るために極めて意義深いことです。そこで、2025年の「キリスト教祈祷一致週間」は、キリスト者がこの生きた信仰の遺産をあらためて探求し、現代の文化に沿ったかたちで再解釈することを目的とし、ニケア公会議とその決定に至った聖書的土台と教会の経験を、祈りのうちに深める機会としたいと思います。ニケア公会議を記念するこの年、キリスト教祈祷一致週間ににおけるエキュメニカル礼拝は、信じることの意味、さらに「わたしは信じます」と「わたしたちは信じます」という、個人または共同体としての信仰の確認を中心に行われます。日本でも、世界に広がる教会と心を合わせてキリスト者の一致を祈るため、カトリック中央協議会と日本キリスト教協議会が共同で翻訳した資料を小冊子『キリスト教一致祈祷週間』として発行し、ポスターとともにご案内しています。

**1月
一日黙想会へのご案内**

指導司祭：ナビーン神父(普天間教会主任)
テーマ：聖書に親しむ
日 時：2025年1月11日(土) 受付 9:30
講 話：10:00～11:00
休 憩：11:00～11:15
個人黙想：11:15～12:15(ゆるしの秘跡・希望者)
昼 休 み：12:15～13:00
分 かち 合い：13:00～14:30
ミ サ：15:00～16:00
※持参するもの 聖書・弁当・飲み物・会費500円
聖マリアの汚れなき御心のフランシスコ姉妹会
連絡先：098-945-2354 098-945-8649



NPO法人ぶどう園の会

訪問看護ステーション クララ



TEL&FAX:098-937-5001

住所 沖縄市泡瀬2丁目37-15

・基本受付 月曜日～金曜日(申込、相談など)

・営業時間 8:30～17:30

・営業日 24時間365日(緊急対応含む)



葬祭の
「やすらい企画」

私たち は故人とご遺族の意向
を最優先に考えます。何でもご
相談下さい。

那覇市首里鳥堀町4-57-3
TEL&FAX:098-885-8205
<http://w1.nirai.ne.jp/yasurai>
E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

24時間
受付

24時間
受付

てんごく
☎098-853-1059



ひがたかしげ
(実務担当) 比嘉 高茂

～ご遺族の心をもって奉仕する～

葬典社

*創業30数余年・・・。

*皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるための
お手伝いをさせていただいております。

*ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。

「ゆうなの会」会員募集中です。